

# 令和六年度入学試験問題

## 国語 問題用紙

〔二〕 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えなさい。

インタビューにしてもドキュメンタリー映画にしても、あるいはフィクションである小説や映画あるいは漫画、アニメーションにしても、登場人物の人生が個別の出来事であるがゆえに、(つつましい日常を送っているとしても)読者や鑑賞者に刺さる。出来事や状況が持つ質感、本書でいう「生き生きとした」「生き生きさ」「切迫した」経験こそが受け手を触発するのだ。

経験が生き生きとしているということはなにも特別なことではない。ショッキングな出来事が起きなくてもよい。私たちの誰もが日常的に感じている出来事にも「生き生き」としているものは多数ある。では、語りのどのような側面から、この生々しさを感じ取ることができるだろうか。

次のインタビューでは、二〇代前半の女性がヤングケアラーだった小学生時代を振り返っている。彼女の母親が覚醒剤を使用しているのを目の当たりにする場面だ。

Aさん 覚醒剤を使用したから、お母さんのほうが。してたから、だからやっぱりお金も足りなくなってるから、(中略)家帰ってもご飯ないとかつていうのが結構あって。それで、ちっちゃいときやったからあんまり記憶もないけど、でも私、結構そういうの繊細だったりするから、ママのこと気にして気にして仕方なかったから、すぐ泣いてたし。もうしょっちゅう泣いてたし、それを弟と妹がずっと見てるみたいな感じでしたね。

この語りのなかで経験が生き生きとしているように感じとれるのはなぜだろうか。

母親が覚醒剤を使っているという極端な出来事のせいだけではない。出来事の語られ方にこそ、Aさんが感じていた深刻さが表現されている。「すぐ」「もう」「しょっちゅう」「ずっと」と交わらないリズムが複雑に絡み合った状況を暗示する。さらに、

I
---

と語尾が繰り返

され切迫したリズムとなる。そして過去の状況に没入して切迫した語りと、矛盾するように「あんまり記憶もないけど」と距離をおいた回想とが交互にはさまる。このような語り方のぎくしゃくした交わらないリズムこそが、当時の経験に没入しながら、今まさに生き生きと(ア)ソウキしていることを示している。

経験の切迫感は語りのいびつな手触りを通して伝わる。このいびつさを分析すると、複数のリズムのからみあい浮かび上がってくる。現実の出来事や状況は決してa理路整然と生きられるのではないからだ。Aさん本人もいま初めて、かつては言葉にならなかった経験に言葉を当てはめようと(イ)タンサクして

いるのであり、当然語りは行きつ戻りつ、矛盾を孕<sup>はら</sup>んだぎくしゃくしたものとなる。

村上 一番印象的なのは、それだけ強くお母さんのことを思えるってどういうことなんだろうって。

Aさん なんででしょうね。たまに、——ママ、つねに不安そうな顔してるっていうか。薬もやってるっていうのもあったから笑わなかったんですね。——あるときママ泣いてて、めっちゃ。泣いてて、家帰ってきたら。声は出してないけど、涙ずつと流れてるんですよ。それで、『守ってあげないと』って思いましたね。

村上 守ってあげないとっていう存在だったんだ。

Aさん そうですね。ママ一人だし、母子家庭で一人だからこそ。あと、自分が長女やからっていうのもあったんですね。責任感強い部分は正直ありました、自分のなかで、なかにはありましたね。(中略) ひたすらあれでしたよ、帰っても「ママおらん」とか、「ご飯ない」とかで、家帰っても。

母親は、「たまに」「つねに」不安な顔をしているが、涙が「あるとき」あるいは「ずっと」流れている。即興の語りだからこそ生まれる決して交わることがない複雑なリズムを通して、薬物を使用する母親自身の不安と、それを見守るAさんが感じていた切迫した不安とが生々しく表現されている。「一人だし」「一人だからこそ」、そして「自分のなかで、なかには」という少しずつ変化しながらの反復も切迫を表現している。

さらにはうつの母親が泣いている光景に、Aさんが長女であるという責任も追加され、状況は重層化されている。生き生きとした語りは、たいていは異なるリズムをもつさまざまな層の経験が複雑に絡み合っ<sup>あ</sup>ってできている。bぎくしゃくした語りの交わらないリズムこそが状況の生々しさを表現し、Aさんが(ウ)オチ<sup>チ</sup>って<sup>い</sup>いた困難と孤立を示す。

私は客観性と(エ)タイショウ<sup>ウ</sup>させて、「経験の生々しさ」という言葉を使っている。数値によって測られるのが事物の特性だ。これに対して、経験の生々しさは、経験の強度にかかわっている。単にモノがそこに存在するだけでは生々しいとはいえない。人がそこに巻き込まれていて、出来事や状況から触発されて、人が応答せざるをえないときに生々しく切迫する。

## II

経験の生々しさは生きている現実感の土台であるが、言葉で表現し尽くすことができない。インタビューは、出来事あるいは人生全体の要約であり、省略であり、(オ)キンジチ<sup>チ</sup>にすぎない。語ることが極めて難しい経験を、あえて言葉にしている。即興的に語ることに言いよどみながらろうじて多少なりともアクセスできる、語り得ない出来事があるだろう。語りが生々しさを表現することと、経験の生々しさを語ることの難しさとは、同じことの裏表である。それゆえにcぎくしゃくした語りにこそ生々しさは顔をのぞかせるのだ。このことは同時に、経験は語り得ないものでもあり、沈黙することも尊重されるべきであるということも意味している。

(村上靖彦『客観性の落とし穴』より、一部改変。)

問1 傍線部ア～オのカタカナを漢字に直して書きなさい。

- (ア) ソウキ (イ) タンサク (ウ) オチイって (エ) タイショウ (オ) キンジチ

問2 傍線部a「理路整然」の意味を書きなさい。

問3

I

に当てはまる具体的なAさんの言葉を、文章から一文節以上三文節未満で二つ抜き出して書きなさい。

問4

II

に当てはまる語句として最も適当なものを、次の①～⑤から一つ選び、記号で書きなさい。

- ① ところが  
② すなわち  
③ しかし  
④ さらに  
⑤ 一方

問5 傍線部b「ぎくしゃくした語りの交わらないリズム」とは何か、最も適当なものを、次の①～⑤から一つ選び、記号で書きなさい。

- ① 複数の感情や出来事が重なり合い、全体としては話の流れが一定でなく不規則になっていること。  
② 一つのエピソードの中で、異なる視点や時系列が交差することにより、物語の深みを増していること。  
③ 話者が聞き手の注意を引くために意図的に言葉を選び、話のテンポを変えて緩急をつけていること。  
④ エピソード内で複数の話者の言葉が交錯し、最終的に一つの結論に結びつかない話になっていること。  
⑤ 詩や散文における異なるリズムを用いることで、感情の起伏やテーマの変化を表現していること。

問6 傍線部c「ぎくしゃくした語りにこそ生々しさは顔をのぞかせる」のはどうしてか、簡潔に書きなさい。

(二) 次の文章を読んで、後の問い(問1〜5)に答えなさい。

顔を洗う水をつめたさが、(ア)イツチヨウごとに身に沁みて、いよいよつめたくなって来る頃である。昼過に何か少し取込んだ用でもしていると日の短くなつたことが際立つて思い知られるころである。(イ)コヨミを見て俄にその年の残つた日数をかぞえて見たりするころである。菊の花は既に萎れ山茶花も大方は散つて、曇つた日の夕方など、急に吹起る風の音がいかにも木枯らしく思われてくる頃である。梢に高く一つ二つ取り残された柿の実も乾きしなびて、霜に染つたその葉さえ大抵は落ちてしまふころである。百舌や鶇の声、藪鶯の笛啼ももうめずらしくはない。この時節に枇杷の花がさく。

枇杷の花は純白ではない。その大きさもその色も麦の粒でも寄せたように、枝の先に叢生する大きな葉の間に咲くので、遠くから見ると、蕾とも木の芽とも見分けがつかないほど、目に立たない花である。八ツ手の花よりも更に見栄えのしない花である。

わたくしの家の塀際に一株の枇杷がある。

大正九年庚申の五月末、築地から引越して来た時であった。台所の窓の下に、いかなる木、いかなる草の芽ばえともわからぬものが二、三本、芥を掃寄せた湿つた土の中から生えているのを見た。わけもなく可憐な心地がしたので、あまり人の歩かないような、そして日当りのよさそうな処を掘んで、わたくしはその芽ばえを移し植えた。一本の芽はしばらくにして枯れてしまつたが、他の一本の芽は梅らしく、又残りの一本は枇杷であることが、その葉とその枝との形から明かになつたのは二、三年過ぎてからのことであつた。以前この家に住んでいた人が、青梅や枇杷の実を食べて何心なくその核を台処の窓から外へ捨てたものであろう。Aわたくしには兎に角卜居の記念になるので、年々その伸び行くのを見て娯しみとしていた。

大正十二年、震災のあつた年の秋、梅の若木はその時分俄に多くなつた人の出入に、いつか踏み折られたまま枯れてしまつたが、枇杷の芽は梅よりも伸びるのが早く、その時既に三、四尺の高さになつていた。然し震災の年から今年に至るまで月日は数えると十二年を過ぎている。わたくしは年と共にいつかこの木の事をも忘れていたが、今年梅雨の晴れた頃の、ある日である。扇骨木や檜などを植込んだ板塀に沿うて、ふと枇杷の実の黄いろく熟しているのを見付けて、今更のようにまたしても月日のたつ事の早いのに驚いたのである。

枇杷の実はわたくしが始めて心づいたその翌日には、早くも一粒をも残さず、近処の蟬取りに歩く子供等の偷み去るところとなつた。夏は去つて蟬は死し、秋は尽きて虫の声も絶え、そして忽ち落葉の冬が来た。わたくしは初めて心を留めて枇杷の枝に色なき花のさき出るのを眺め、そして再びその実の熟する来年のことを予想した。今年も今は既に十一月の末になつてゐる。

わたくしは枇杷の花を見ると共に、ふとB鳥居甲斐守の逸事を憶い出した。鳥居甲斐守は老中水野越州が天保改革の時、江戸町奉行の職に在り、一世の怨を買つて、酷吏と称せられた人である。名は燿蔵、諱は忠輝、号を胖庵といい、祭酒林述齋の第二子である。弘化二年十月罪を獲て改易となり、その身は讃州丸亀の領主京極氏の藩中に禁固せられた。時にその年五十歳であった。歲月は匆匆として過ること二十五年、明治戊辰の年となつて、徳川氏は大政を(ウ)ホウカンしたので、丸亀藩では幕府の罪人を預つて之を(エ)カンシする義務がなくなつた所から、甲斐守の罪を許して江戸に放還しようとした。然るに甲斐守は頑として之を聴かず、おのれは徳川氏の臣にして罪を幕府に獲たのである。幕府より赦免の命を受くるに非ざれば私に配所を去るわけにはゆかないと言つた。丸亀藩では処置に(オ)キユウし、新政府に申請して鳥居甲斐守放還の命を發した。ここに於て甲斐守は新に静岡の藩主となつた徳川氏の許に赴き自ら赦免を請うた後、白髪孤身、飄然として東京にさまよい來つたと云う。

甲斐守が初め弘化二年の冬丸亀の配所に幽閉せられた時、たまたま枇杷の実を食しその核を窓の外に捨てたことがあつたが、二十五年を過ぎて、その將に静岡に赴こうとする時、枇杷の核は見上げるばかりの大木となつていた。甲斐守は之を指し藩中の士を顧みて、この木はわが幽閉の記念である。今は用なければ伐つて薪木にでもせられたがよいと言つて笑つたさうである。わたくしは曾てこの逸事を角田音吉氏が水野越前守と題した活版本について見たのである。

わたくしは史家ではない。古今の事蹟を鑑み人物の成敗を論評せんと欲するものではない。併したまたまわが陋屋の庭に枇杷の核の生育して巨木となつたのを目前に見る時、歲月の経過を顧み、いかに甚しく時勢の変転したかを思わずには居られない。

わたくしが亡友井上啞々子と相携えて散策の途次、始めてこの陋屋の門を叩いたのは大正八年の秋も暮れ行く頃であつた。最初、時事新報の紙上に出ていた売宅の広告を見て、道を人に問ひながら飯倉八幡宮の裏手から我善坊ヶ谷の小徑を歩み、崖道を上つて市兵衛町の通へ出たのである。山形ホテルの門内に軍服らしいものを着た外国人が大勢立話をして居るのを見て、何事かと立止つて様子をきくと、このホテルはチエコ、スロバキア國義勇軍の士官に貸切りになつて居るとの事であつた。崖の上から見下す笹筒町の窪地には樹木の間にところどころ茅葺家根が見えた。市兵衛町の表通には黄昏近い頃なのに車も通らなければ人影も見えず、夕月が路端に聳えた老樹の梢にかかつて居るばかりであつた。わたくしはこの夕月を仰ぎ見て道の赴く方角を推知し、再び飯倉八幡宮を目標にしながら電車通へ出たのであつた。

そのころ愛宕山の麓には仏蘭西航空団とかいた立札が出してあつたが、飛行機はまだ今日の如く頻繁に空を走つてはいなかつた。靈南坂を登る時、米國大使館の塀外を過ぎて、その頃には深夜立番して居る巡查の姿を見るようなことはなかつた。震災後銀座通に再び柳が植えられた頃から、時勢は急変して、妓家酒亭の主人までが代議士の候補に立つような滑稽な話は聞きたくも聞かれなくなつたが、その代りカフェーの店先にも折々鎧をきた武者人形が飾られ、骨董屋

の売立広告にも「珍品の砲列を布き廉売の商策を回す」などという文字を見るようになった。

わたくしは日常見聞する世間の出来事を記載することを好んでいる。然しながら之に就いて是非の議論を試ることを欲しない。わたくしの思想と趣味とはあまりに遠く、C過去の廢滅した時代に属していることを自ら知っているが故である……。

陋屋の庭には野菊の花も既に萎れた後、色もなき枇杷の花の咲くのを眺め、わたくしは相も変わらずD「羈鳥恋旧林。池魚思故淵」というような古い詩を読み返している。斯くの如くしてわたくしの身は草木の如く、徒に老い朽ちて行くのである。

(永井荷風「枇杷の花」『日本近代隨筆選』 出会いの時』より、一部改変。)

問1 傍線部ア～オのカタカナを漢字に直して書きなさい。

(ア) イッチョウ (イ) コヨミ (ウ) ホウカン (エ) カンシ (オ) キュウシ

問2 傍線部A「わたくしには兎に角卜居の記念になる」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤から一つ選び、記号で書きなさい。

- ① 枇杷の木が、筆者が新しい家に引っ越してきて最初の発見だったから。
- ② 枇杷の木が、筆者の運命がこれから変化することを教えていたから。
- ③ 枇杷の木が、筆者の亡くなってしまった友人を思い出させるから。
- ④ 枇杷の木が、筆者の人生の新しい章の始まりを象徴していたから。
- ⑤ 枇杷の木が、筆者の何もない質素な家で唯一の植物だったから。

問3 傍線部B「鳥居甲斐守の逸事を憶い出した」とあるが、なぜ筆者は「憶い出した」のか、六〇文字以上七〇文字以内で書きなさい。

問4 傍線部C「過去の廃滅した時代に属している」とあるが、筆者は「過去の廃滅した時代」はどうだったと描写しているか。本文に沿って二つ書きなさい。

問5 傍線部D「鶯鳥恋旧林。池魚思故淵」という漢詩の意味として、最も適当なものを、次の①～⑤から一つ選び、記号で書きなさい。

- ① 渡り鳥は古くからある林に住みたいと憧れ、池の魚は昔からあると聞いている深い川に憧れる。
- ② 渡り鳥は昔住んでいた林を恋しく思い、池の魚は昔住んでいた深い川を懐かしがる。
- ③ 渡り鳥は昔住んでいた林を恋しく思い、池の魚は今のすみかよりも深い川を求めて泳ぐ。
- ④ 渡り鳥は前の林を手放したことを惜しみ、池の魚は昔からあると聞いている深い川に憧れる。
- ⑤ 渡り鳥は前の林を手放したことを惜しみ、池の魚は今のすみかよりも深い川を求めて泳ぐ。

受験番号

(一)

問 1	ア
	イ
	ウ
	っ
	て
	エ
	オ

問 2	

問 3	

問 4	
-----	--

問 5	
-----	--

問 6	

(二)

問 1	ア
	イ
	ウ
	エ
	オ
	シ

問 2	

問 3				

問 4	

問 5	
-----	--